

※ ステープラー（ホッチキス）留めの場合の位置→

※ふりがなは、本名・ペンネームともに記すこと。
ペンネームが漢字の方もいます。

二〇××年 第××回随筆春秋賞 応募作品

タイトル ● 牛乳瓶の音

本 名 ● 近藤 健

ふりがな ● こんどうけん

ペンネーム ● 近藤健

ふりがな ● こんけんどう

生年月日・性別 ● 昭和××年××月××日生 男性

住 所 ● 〒001-0000

北海道札幌市北区北××条西××丁目
ラビットマンション101

電話番号 ● ×××-×××-××××

職 業 ● ××××株式会社勤務

※必要事項が記されていれば、表紙のスタイルは
問いません。

見本は、[レイアウト]—[ページ設定]で文字数と行数を 20 文字×20 行に設定。

ちなみに、この例では、本文の文字の大きさ 15.5pt、ふりがな 7.5pt に設定。

※作品本文は一行目から書き始めること。

冬の朝。瓶の触れ合う音が聞こえてくる。
厚手の瓶がいくつもぶつかり合う音だ。近所の人が、ポリ袋から資源回収箱へ空き瓶を移しているのだ。温かい蒲団の中でその音を聴いていると、遠い遠い三十年（二〇〇五年時点）も昔の風景が甦^{よみがえ}る。

中学一年の雪の朝であった。
近所に住む同級生の浩一が、牛乳配達のアバイトをしていた。その朝、私は興味本位で浩一について回ったことがあった。
夜が明けたばかりの北海道の冬の朝。寒気で肌がチリチリと粟立つ。そんな中、軍手を二枚重ねにはめた浩一が、機関車きょうかんのように白い息を吐きながら、暁闇きょうあんの光の中を近づいてくる。しかも、業務用の自転車に乗って。つい最近まで、一緒に三角乗りをして遊んでいたのに……。
行末の禁則処理一文字増は許されます。
以降、同じ①

その朝の浩一は業務用にちゃんとまたがり、
かろうじて爪先だけで漕こいでいた。しかもハ

1 ← ①

ページ番号は作品本文の最初のページを「1」とします。

見本は、[レイアウト]—[ページ設定]で文字数と行数を 20 文字×20 行に設定。

ちなみに、この例では、本文の文字の大きさ 15.5pt、ふりがな 7.5pt に設定。

ンドルの左右には、牛乳袋がずっしりとぶら下がっていた。浩一は、雪道と牛乳袋の重みにハンドルを取られながら、ゆっくりと力強く走ってくる。小柄な浩一が大きく見えた。「悪りイー、遅くなったあ」

浩一の顔が真っ赤に上気している。

一つの牛乳袋には、二十本の牛乳が入っている。左右あわせて四十本になる。そのバランスをとりながら大人の自転車に乗るのは、雪道でなくても軽業に近い。

「おめえ、よくこんなんでも自転車で乗れるな」①

と感心すると、途中で転んで二本も割ってしまった、と照れ笑いした。なるほど片方の袋の底に、小さな白い氷柱が下がっている。牛乳袋の底には小指の先ほどの穴があり、瓶が割れても袋の中に牛乳が溜^たまらないようになっていた。牛乳は数本余分に積んでいるので、大丈夫だという。

浩一がハンドルを握り、私が自転車の後を押しながら坂道を登る。やっと最初の一軒目

見本は、[レイアウト]—[ページ設定]で文字数と行数を 20 文字×20 行に設定。
ちなみに、この例では、本文の文字の大きさ 15.5pt、ふりがな 7.5pt に設定。

以下省略

にたどり着く。浩一は毎朝、たった一人でこの作業をやっていた。
「この家は二本だ。空き瓶、入ってるから持ってきてくれ」